

第3回 建コンフォト大賞

くらしをささえる “どぼく”

当協会では、広く一般の方々の土木施設への興味を高め、建設コンサルタントをより知っていただくために、平成21年より「建コンフォト大賞」を年1回開催しています。今回は「くらしをささえる “どぼく”」をテーマに、道や橋、鉄道、上下水道、空港や港、公園や堤防など、私たちの日常生活を支える土木施設のある風景を撮影いただきました。

平成23年6月から3ヶ月間、当協会ホームページやフォトコンテストに関する情報提供サイトへの掲載、新聞、全国約520の図書館へのポスター配布などで作品を募りました。

その結果、全国の幅広い年齢層の方々から119点の応募をいただきました。

審査方法

ご応募いただいた作品は、審査委員（5名）および当協会広報委員会による審査会にて入賞作品を決定しました。

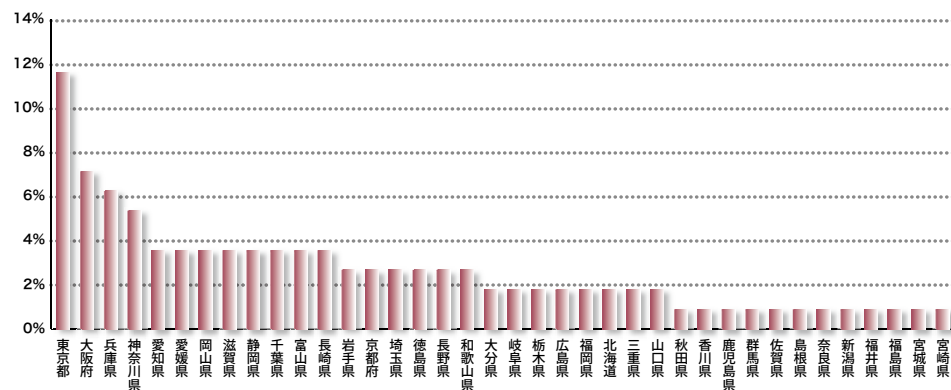
審査結果

最優秀賞1点、優秀賞2点、特別賞9点を決定しました。入賞作品と講評は次ページ以降に掲載するとおりです。

審査委員

審査委員長 伊藤 清忠 （東京学芸大学名誉教授）
審査委員 宇於崎 勝也（日本大学准教授）
知野 泰明 （日本大学准教授）
初芝 成應 （日本写真作家協会員）
廣瀬 典昭 （建設コンサルタンツ協会総務部会長）

地域別の応募者





優秀賞



「夏休み」

和歌山県 山中 健次

(撮影地：岐阜県養老郡養老町)

【撮影者のコメント】

岐阜県が「水と親しむ砂防公園」をめざして実施している事業で、養老町の滝谷に砂防環境整備施設が完成し、夏休みには、子ども達が家族と多数訪れ、水とふれあい楽しんでいます。この日も兄妹が自然の中で夏休みを満喫していました。

講 評

石と水との質感と位置により変化する落水の形や位置など、変化に富む水流を引き立てる石垣の風景に、水を眺め戯れる兄弟の生き生きとした表情の対比が効果的です。(伊藤審査委員長)

階段状に整備された砂防施設はどっしりと落ち着いた石積みの堤とダイナミックで美しい水流が対比的で、その中にいる兄妹もまた静と動の様相を示した一瞬をとらえており、生き生きとした感じを受け、夏らしさが伝わります。(宇於崎審査委員)

子供たちを歓喜させるステージ。透明な水の壁と緑が、彼女たちの感性をくすぐっています。土木構造物本来の機能を越えた存在が見事に活写されました。(知野審査委員)

それほど高くも無い段段の水のカーテンに、両手を上げて接近して遊ぶ子供の姿が新鮮です。この作品から周囲の環境が想像でき、水のカーテンの水音が聞こえてくるようです。人物にピントを合わせると良いと思います。(初芝審査委員)

落水の流れと遊んでいる子供の動きの対比が面白く、構造物で硬くなりがちな画面の印象を柔らかくしています。落差工の石、流れ落ちる水、緑の草の色合いのバランスが良いです。(廣瀬審査委員)



優秀賞



「秋の風景」

北海道 山内 佳子

(撮影地：北海道美瑛市)

【撮影者のコメント】

9月の晴れた日、ふらりと光珠内駅付近に鉄道を撮影しに行った時に初めてこの水門に出会いました。その姿は秋の美しい農村風景に溶け込んでいて自然と一体化した芸術作品の様に見え感動したので思わず何枚も撮影した中の一枚です。これからも長くその姿をとどめて欲しいと思いました。

講 評

夕日に染まりゆく北海道の秋の午後、水門がある何処にでもありそうな農村風景を、静かな感動をこめて素直で穏やかに表現しています。(伊藤審査委員長)

農業をささえる重要な土木施設、用水路と水門をとらえた1枚。豊かな実りの余韻を感じさせます。北海道の広大な大地を夕日が染め、どこか懐かしい田園風景であるとともに、間もなくやってくる凍てつく冬も予感させます。(宇於崎審査委員)

晩秋の農地にたたずむ古風な水門。シンプルなそのデザインに機能美を感じます。年季が入った土木構造物がウイंकしているような姿に、何故か愛着が湧いてきます。(知野審査委員)

秋も深まりセピア色の世界がこの作品に滲み出ています。弱弱しい光が左斜め前方より射し、もうすぐ雪景色で染まるであろう水門と水路を、残り少ない秋を惜しむがごとく照らしています。日本の原風景を見るようです。(初芝審査委員)

題材がユニークです。何げない風景ではあるが、構造物が風景によくなじんでおり、どこかほのぼのとした懐かしさを感じさせます。秋の夕暮れの田園であろうか、その色合いのなかに田園の広がりを感じられます。(廣瀬審査委員)

特別賞



「守る」
長野県 大木 孝一
(撮影地：岐阜県各務原市)

【撮影者のコメント】

線路を、ダイヤを守る人々です。
造られた「物」ではなく造る、守る「者」にスポットを当てました。

講 評

くらしをささえる“どぼく”をささえる「人」がテーマ。延々と続く線路と、それを守る作業に携わるここに写る4人の背中には信頼感が漂っています。安全を保障する業務とそれを担う人々に感謝。



「文明の夜明け」
千葉県 藤井 翔太
(撮影地：京都府京都市)

【撮影者のコメント】

この写真は今夏、旅行の際に南禅寺に訪れ、境内に水道橋があった驚きと明治に建造され今に至るまで現役でいる感動と共に見上げている友人を撮った一枚です。

講 評

鏡の部屋に迷い込んだのか。否、京都の近代化を支え、かつ現役の土木遺産が創り出す造形美とリズム感が為した技。レンガのアーチとエイジングされた色彩が異国情緒、そして風格すらたたえています。

特別賞



「電車も走っています」
兵庫県 橋 初雄
(撮影地：岡山県倉敷市)

【撮影者のコメント】

四国と本州を繋ぐ三橋の一つ「瀬戸大橋」。この橋だけが二階建の鉄道併用橋。JR 四国にとっては最重要路線であると思う。利用者にとっても四国が近くなり、非常に便利になった。
電車が走ってくると鉄橋独特の「ゴーーーーー！」という音が聞こえてくる。橋の規模が大きくバスやトラック、それに電車もオモチャのように感じられる。

講 評

電車・バス・トラックが走行し、さらに海上に大小の船が航行し、鉄道併用橋「下津井瀬戸大橋」の特色がよく表現されています。主役である電車の色・形・位置がやや不鮮明なのが惜しまれます。



「ローカル鉄道」
岐阜県 松井 英次
(撮影地：岐阜県美濃市)

【撮影者のコメント】

JR高山本線的美濃太田駅から奥美濃を結ぶ長良川鉄道は、国鉄改革で廃止対象路線となるが、地元主導の第三セクター鉄道となり、清流長良川を眺めながらのんびり走る、まさにローカル鉄道ならではの楽しさがあります。建設当初は越前(福井)と美濃(岐阜)を結ぶ鉄道として計画されたが、険しい山越えになるため工事は凍結されたままとなっている。車社会の今、その線路に沿うように高速道路の東海北陸自動車道が北進しています。

講 評

東海北陸自動車道と長良川鉄道の新旧の対比とその重なり具合がユニークな構図を作っている。今にもガタゴトと音が聞こえてきそうな車両をジャストタイミングでとらえ、上下線二手に分かれた自動車道がその音を空に伝えていくようです。

特別賞



「冬の鉄塔」
兵庫県 渡邊 俊幸
(撮影地：兵庫県宍粟市)

【撮影者のコメント】

日本のエネルギーをささえる高圧送電線網は山々を一直線に結ばれていることが多く、山の頂きや中腹に立つ鉄塔の工事は難工事だろうと思われる。冬、吹雪の中で気高く立つ鉄塔を撮らえた。

講 評

吹雪の奥深い山間に立つ送電線は厳しい冬から、庶民の生活を守らねばかりに、吹雪の悪条件に負けることなく正しく気高く立つ姿を逞しく捉えています。



「漁港を守る」
山口県 来栖 旬男
(撮影地：山口県下関市)

【撮影者のコメント】

北浦の海は水もきれいで、普段は静かな美しい景観を見せる海である。しかし一旦天候がくずれると北浦の海は荒れる。漁業で生活を営む人々にとって必要なことは嵐から波を防ぎ舟を守ることである。この防波堤は自然の岩を利用して、更に数多くの消波ブロックで波を抑止し、より強固なものとして威力を発揮していると思う。

講 評

手前の消波ブロックが強調されすぎているきらいはあるが、穏やかな夏の漁港の雰囲気が出ています。消波ブロックの白と、海と空の青、そして雲の白と、色合いの対比が鮮やかです。

特別賞



「土木遺産トロッコ軌道跡の連続アーチと堤防」
大阪府 中原 文雄
(撮影地：兵庫県朝来市)

【撮影者のコメント】

かつて日本の国をささえた生野銀山。1200年の歴史と数多くの遺構は、さながら各時代の複合遺跡の様相を見せる。中でも大正9年に建設されたトロッコ専用軌道は、市川の堤防と一体となった石積の景観が趣のあるインパクトをもち、郷愁をさそう土木遺産となっている。

講 評

トロッコ軌道と堤防の組み合わせが一種不思議な景観を作っています。説明されないとどれが土木遺産であるのか分かりにくいですが、土木遺産という雰囲気はうまく表現されており絵になっています。



「山とヤマ」
東京都 小川 拓馬
(撮影地：富山県中新川郡立山町)

【撮影者のコメント】

自然と人工の対比が美しい。これは黒部ダム風景である。一見すると環境破壊に見えるかもしれない。しかし、このような“どばく”技術を駆使して自然と共存することによって、人々は非常に便利な生活を送っているのである。

講 評

黒部の大きなダム湖を守る山。その山が、人の造った鎧をまとい、緑の山々と一体の風景となりました。自然をも圧倒するスケールが山の対峙を成功させているのだと思います。



「白い激流」

富山県 高畑 訓

(撮影地：富山県富山市および立山町)

【撮影者のコメント】

立山連峰に降った雪・雨は、称名滝を流れ落ち、急流の常願寺川をかけおりて富山湾に流れ出ます。常願寺川には多くの砂防施設があります。日本一の貯砂量を誇る本宮砂防堰堤は、災害から私達の暮らしを守っています。この雄大な自然あふれる富山の姿を芳見橋から一望できます。

講 評

的確な季節・撮影位置で、厳しく美しい立山連峰、階段状に連なる本宮砂防堰堤を流れ下る常願寺川、常願寺川をひとまたぎする立山大橋などに作者の思いが込められています。

〔受賞作品マップ〕

